

## 郡山女子大学服飾資料展示の沿革

～井筒雅風と関口富左～

History of Exhibitions of Clothing Materials at Koriyama Women's University:

Research on Dr. Gafu Izutsu and Dr. Fusa Sekiguchi

齋 藤 美保子

Mihoko Saito

瀬 谷 真理子

Mariko Seya

In 2022, the “Gallery of Japanese Customs” ameliorated the arts and crafts, folk tools on campus, added them to the collection, and developed them into the “Life Culture Museum”. The “Gallery of Japanese Customs” exhibited custom life-sized dolls supervised by Dr. Gafu Izutsu, had been donated from 1966 to 1984, as commemorative gifts by graduates of Koriyama Women's University and Colleges.

Seya's interview at the Izutsu Company in Kyoto and research in the Dr. Gafu's many writings realized that he was the excellent historian of customs. The thirty-five dolls supervised by him, which have been handed down to the “Life Culture Museum” as Japanese traditional clothing materials, are worthy of being displayed for a long time.

### はじめに

令和4(2022)年10月に従来の「日本風俗美術館」に、学内の美術工芸品、民具等を整備し、収蔵品目録に加えることで「生活文化博物館」が発足した。これを機会に、人間守護の家政学を標榜する郡山女子大学において、服飾資料が展示されてきた沿革と意義をまとめておく必要を痛感し、美学美術史、博物館展示論を専門とする齋藤と被服学、家庭科教育を専門とする瀬谷が研究を始めたところである。「日本風俗美術館」は、風俗研究家、井筒雅風の尽力で漸次完成に至った施設であった。第一報となる本稿では、第1章で「日本風俗美術館」としての半世紀を超える経緯を齋藤が振り返る。第2章以降は、瀬谷が井筒雅風(八代目 井筒與兵衛)について、風俗史学の視点から文献を基に探っていくとともに、家業であった京都の株式会社井筒を訪問し、後継者である九代目 井筒與兵衛氏にお会いして聞き取り、さらに文献調査を進めながら、井筒雅風の業績をまとめるものである。

## 第1章 日本風俗美術館

郡山女子大学の「日本風俗美術館」は、昭和41(1966)年に、竣工したばかりの図書館棟の1階に井筒雅風氏監修の風俗人形24体を設置して「風俗史美術展 一衣を中心として」を開催した時に始まる。その時に配布された資料の巻頭には、「日本風俗史美術館の開設について」という題で、郡山開成学園の創立者であり、当時学長であった関口富左(1913～2013)の熱い思いが記されている。

学園創立二十周年並びに郡山女子大学開学記念のこのよきとき、かねてより企画しておりました日本風俗史美術館の一部開設を見ることができましたことを深く喜びます。

衣服は年齢、性別、職種、時代、地域、そして人柄によりまことに複雑多様さを表わし、人の心と、時代の反映を表わし諸種の生活様態を示すものは他に類をみないでしょう。(中略) 幸い日本時代風俗史研究所主幹井筒雅風氏の御尽力によりここに再現を見ましたことは誠に感謝にたえません。

本年は第一期として当館所蔵のものは四体のみですが、漸次充実をはかり、約五十種位の各時代風俗を再現する計画であります。(中略)

本展二十体の時代風俗は井筒雅風氏よりの借用のもので考証、解説の御指導を頂きこの運びに至りました。ここにその御協力を深謝し開館の御挨拶をいたします。<sup>1)</sup>

その後19年間にわたり、大学並びに短期大学部からの卒業生が卒業記念品として井筒雅風氏の人形を購入、学園に寄贈して行った。当初目標の50体には届かなかったが、35体をもって、昭和59(1984)年に「日本風俗美術館」が完成し、現在までそのまま継承されている。古代から江戸時代までの服飾を身にまとった等身大の人形の概要は、『創立四十年学園史』(1986年)の表<sup>2)</sup>を基に、配布資料『風俗史美術展一衣を中心として』(1966年)、購入時の井筒からの解説、見学者へのリーフレット<sup>3)</sup>、備品台帳等の記述を加味し整理すると、次の通りである。



図1 「日本風俗美術館」2022年夏(齋藤撮影)

表1 展示人形一覧(時代順)

展示番号	人形名(時代)	〈人物イメージ〉	購入時期
1	衣、禪の男子(古墳時代)		昭和41(1966)年度
2	衣、裳の女子(古墳時代)	あめのうずめのみこと 〈天鈿女 命〉	昭和53(1978)年度
3	あやはとり 漢 織(古墳時代)	〈五世紀に渡来した機織女〉	昭和51(1976)年度
4	くれはとり 呉 織(古墳時代)	〈五世紀に渡来した機織女〉	昭和51(1976)年度
5	朝服(飛鳥時代)		昭和54(1979)年度
6	女官朝服(飛鳥時代)		昭和54(1979)年度
7	養老の衣服令による命婦礼服(奈良時代)		昭和59(1984)年度
8	武官朝服(奈良時代)		昭和59(1984)年度
9	貴婦人礼装姿(奈良時代)		昭和41(1966)年度
10	公卿束帯姿(平安時代)		昭和44(1969)年度
11	女官晴れの装束姿(平安時代)		昭和44(1966)年度
12	公卿直衣(平安時代)		昭和41(1966)年度
13	公家女房小桂姿(平安時代)		昭和41(1966)年度
14	公家女子細長(平安時代)		昭和57(1982)年度
15	童子水干姿(平安時代)	〈牛若丸〉	昭和59(1984)年度
16	僧兵裏頭姿(平安時代)	〈弁慶〉	昭和56(1981)年度
17	しらびょうし 白拍子(平安時代)	〈静御前〉	昭和56(1981)年度
18	武士直垂姿(鎌倉時代)		昭和42(1967)年度
19	婦人つば装束、むしのたれぎぬ姿(鎌倉時代)		昭和52(1977)年度
20	つば装束に桂をかついた旅姿(鎌倉時代)		昭和58(1983)年度
21	かつらめ 桂女(室町時代)		昭和53(1978)年度
22	おはらめ 大原女(室町時代)		昭和53(1978)年度
23	雑兵腹当姿(室町時代)		昭和54(1979)年度
24	かつぎ 婦人被衣姿(室町時代)		昭和41(1966)年度
25	どろふく 武将胴服姿(安土・桃山時代)		昭和42(1967)年度
26	武家上流婦人打掛冬姿(安土・桃山時代)	〈豊臣秀吉〉	昭和42(1967)年度
27	胴服姿の茶人(安土・桃山時代)	〈千利休〉	昭和57(1982)年度
28	諸国勧進の出雲の巫女(安土・桃山時代)	〈出雲のお国〉	昭和58(1983)年度
29	キリシタンを信仰する武士(安土・桃山時代)		昭和58(1983)年度
30	白無垢花嫁(江戸時代)		昭和57(1982)年度
31	文楽人形(江戸時代)		昭和48(1973)年度
32	武家肩衣長袴姿(江戸時代)		昭和52(1977)年度
33	すおう 武士素襖姿(江戸時代)		昭和56(1981)年度
34	ながひたれ 武家長直垂姿(江戸時代)		昭和48(1973)年度
35	かっぱ 町人道中引廻し合羽姿(江戸時代)		昭和55(1980)年度
36	江戸前期小袖姿(江戸時代)		昭和55(1980)年度

表の31番の文楽人形一対は各1メートルほどの大きさだが、他の35体は等身大の着装人形である。そのほかに、『風俗史美術展―衣を中心として―』に「武将大鎧姿」と明記されて以来の大鎧と鍬形の前立の兜が鎌倉時代の人形の間に展示され、現在に至っている。昭和59(1984)年に「日本風俗美術館」としての展示が完成して以来、「京都より東ではその数、内容ともに最大の規模」を誇る日本服装史の実物資料として、学生の教育はもとより、折々の一般公開で、「地域文化向上の一助」ともなってきた。

これほどの充実した展示を学園創立者、関口富左に思い立たせた井筒雅風とは、いかなる人物であったのだろうか。昭和59年当時を知る教職員も今や殆ど退職し、長らく途絶えた井筒との御縁を結び直すことが本学の課題となってきた。その様な矢先の2022年8月、瀬谷が京都を訪ねて後継者にお会いし、更なる文献調査を重ねて、雅風の実像をより鮮明にすることができたのは幸いであった。

## 第2章 井筒雅風と株式会社井筒

### 1. 井筒雅風(八代目 井筒與兵衛)(1917-1996)について

井筒雅風は、大正6年2月、宝永2(1705)年創業の法衣商を営む七代目 井筒與兵衛の長男(幼名政一)として京都に生まれた<sup>4)</sup>。父は与三郎(七代目 與兵衛)、母は三津。六代目 與兵衛が子どもに恵まれなかったため、ともに養子として井筒家に入っていた与三郎と三津が結婚し、井筒家にとって待望の男子誕生だった。醒泉小学校から京都府立第一商業学校に進み、卒業後は荒木伊助商店へ見習いのため入社した。昭和10年、荒木伊助商店を退店し、井筒法衣店に入店し、同時に立命館大学専門部(夜間)に入学した。家業を習い覚えるうちに、仕事に関連した学問がしたいという思いからであった。しかし日中戦争が激化する中で徴兵検査に合格し、兵役等準備のため立命館大学専門部を休学し、昭和13年に豊橋陸軍教導学校に甲種幹部候補生として入校した。同校を卒業すると、独立混成第6旅団砲兵隊に配属され、中国山東省で軍務に服することとなった。どのような武勲を立てたのか定かではないが、昭和17年、勲五等に叙され瑞宝章を受けて、召集解除となった。内地に帰還し、太平洋戦争下で苦労も多かったであろう井筒法衣店に復帰した。昭和19年、先代の死去により井筒家八代目を継承、幼名政一を廃し、八代目 與兵衛を襲名して、法衣の他、神官装束等を取り扱う株式会社井筒取締役社長となった。家業を継いだこともあり、改めて学問の必要性を覚え、昭和20年、立命館大学文学部に入学した。しかし敗戦間近に再召集を受け、広島で原爆に見舞われ被爆、終戦後、井筒に帰店した。

戦後、法衣の主材料であった絹織物が進駐軍の命令により販売禁止となるなど混乱の中で、絹製品に代わる素材で代用品を製作するなど家業に奔走した。そのためか、昭和21年に立命館大学文学部を中退したが、この頃から正文、雅風、雅山人等の雅号を用いるようになった。昭

和23年、京都法衣商業組合理事長に就任した。昭和25年には株式会社井筒へ組織を変更し、社長となった。家業が整うにつれ、立命館大学在学中の恩師である江馬務との師弟関係を深め、風俗研究家、江馬務が所長を務めていた風俗研究所において昭和25年以来、長らく主幹を務めた。また家業を下支えする学問的研究機関として昭和26年に、財団法人宗教文化研究所を設立し、理事長となった。江馬務と井筒雅風の関係については、第4章で詳述する。

昭和27年以降は、平和を取り戻し経済的にも成長に転じた世相に乗じて、北野をどり、鴨川をどり等の衣裳考証にあたる。これ以降、現在に続く。また、伊勢神宮式年遷宮においては第59回(昭和28年)以降の装束の一部を受注した。昭和30年代、40年代は外遊および海外での舞楽の実演紹介などにも努め、極めて精力的に活躍したが、昭和32年に発表した「風俗博物館建設のための等身大風俗人形計画」、および翌年京都市美術館で開催された「日本時代風俗展」が画期的であった。この「日本時代風俗展」のその後の展開は第4章に譲るが、計画発表から17年後となる昭和49年に雅風は、財団法人宗教文化研究所所轄の「風俗博物館」を設立し、館長兼学芸員として就任した。また、この間に日本風俗史学会理事・関西支部長を務め、昭和37年の東京国立博物館開館70周年記念展では僧服の部を担当した。さらには京都成安学園教授・理事長、成安造形大学理事長・学長を務めた。そのほか京都女子大学・池の坊短期大学等で非常勤講師を務めるなど篤学なだけでなく、後進の育成にも熱心であった。昭和55年には、京都ポストン姉妹都市締結祝賀に請われて風俗人形を展示し、昭和56年には、長年の研究が認められて米国ロサンゼルスオリエンタル大学名誉教授、文学博士となった。

学問人としては、宗教服装史・日本風俗史を専門にし、財団法人宗教文化研究所で研究し、多数の著書がある。主要なものに、『日本風俗史雑考』『日本時代風俗写真図録』(昭和15年日本時代風俗建設委員会)、『井筒家々史料』(創業255年会社設立10周年記念)、『袈裟史』(昭和39年文化時報社)、『法衣史』(昭和49年雄山閣)を刊行し、『平安時代の室内と工芸1-1』(昭和55年『宗教文芸』)、『原色日本服飾史』(昭和57年光琳社)、『日本服飾史考証-2』(昭和58年)、『カラースライド絵で見る日本史』(昭和59年光琳社)、『日本服飾史 男性編』(2015年光村推古書院)、『日本服飾史 女性編』(2015年光村推古書院)などがある。『原色日本服飾史』は、日本風俗史学会第10回江馬賞を受賞した<sup>5)</sup>。また『日本風俗史辞典』(弘文社)、『江馬務著作集』(中央公論社)の編集委員を、昭和51年以来務めた功績も看過できない。

以上の資料については、井筒雅風著『撫脛翳手』<sup>ふけいしゅ</sup>(京都成安女子学園発行)に付された年譜<sup>6)</sup>が詳細である。この著書は、本学図書館に井筒雅風御本人より寄贈されている。

## 2. 株式会社井筒について

株式会社井筒について、会社ホームページより確認するとともに、訪問した際に聞き取り、確認した現在の状況を含めまとめる。



## (1) 創業と沿革<sup>7)</sup>

井筒の創業は、初代清水市三郎が藤屋庄兵衛と称し、五条新町西入るにおいて法衣商を開業した宝永2(1705)年に遡る。享保2(1717)年に、油小路通六条(旧称魚の棚)上るに移転し、その時から当主が井筒與兵衛を名乗るようになった。幕末から維新を乗り越えて、明治に入り、明治21(1888)年、六代目 井筒與兵衛が寺院へのカタログ販売を開始した。大正中期になると七代目 井筒與兵衛が法衣屋のCMを映画館において上映したとのことで、進取の気性に富んだ経営が受け継がれてきたと思われる。戦後は井筒雅風の下、先にみたような経営を整えていった。表2に戦後から井筒雅風が逝去した平成8年までを記す。

表2 株式会社井筒の沿革(1949～1996)

昭和24年(1949)	神社ならびに仏教各派へ部門を拡張、東京および福岡に連絡所を新設
昭和25年(1950)	株式会社に組織変更
昭和27年(1952)	鴨川をどり・北野をどりの衣裳考証を担当
昭和28年(1953)	伊勢神宮第59回式年御遷宮を受注
昭和44年(1969)	調達品製作の工場新設(堀川通七条下る)
昭和48年(1973)	伊勢神宮60回式年御遷宮 御装束・御神宝を納品
昭和49年(1974)	井筒法衣店 新店舗竣工 風俗博物館開館(一般財団法人 宗教文化研究所で運営)
昭和53年(1978)	旧本社竣工 井筒肇(現社長) 株式会社井筒入社
昭和60年(1985)	黒澤明監督の「乱」に於けるワダエミ担当の衣裳を製作
平成5年(1993)	伊勢神宮61回式年御遷宮 御装束・御神宝を納品
平成8年(1996)	当代(九代目)井筒肇 (株)井筒 社長就任

井筒雅風は、昭和49(1974)年井筒法衣店の新店舗竣工に際し、念願であった「風俗博物館」を開館し、運営は一般財団法人宗教文化研究所が担った。平成8(1996)年、当代(9代目)井筒肇氏が(株)井筒社長に就任すると、平成18(2006)年にはホールディングカンパニー(株)Izutsu Motherを設立し、平成19(2007)年(株)井筒の各部門を分社化した。

令和元(2019)年には(株)井筒 東京を設立。本社を東京(井筒西麻布ビル)に置き、御大札の装束を宮内庁に納品するなどして、今日に至っている。

## (2) 事業概要

株式会社井筒は、(1)で記載した通り、宝永2(1705)年に法衣商として創業し、以来三百有余年の伝統を保持し発展を遂げている。昭和23年に井筒雅風(八代目 井筒與兵衛)が京都法衣商業組合理事長に就任し、その後、仏教各派・神社界・カソリック・稚児衣裳など各部門に事業を拡大し、今日の株式会社井筒の基礎を築いた。宮内庁・全国有名社寺の装束・調度などを調進、昭和28年には伊勢神宮第59回式年遷宮の御装束を奉仕されたのをはじめとして、全国各方面での事業展開がなされ、業界としての大きな発展を遂げてきた。

現在は、長男の井筒肇氏 (九代目 井筒與兵衛) が代表取締役社長を務め、平成19年に株式会社井筒の業務内容を各部門ごとに分社化し、企画部門を中心として株式会社井筒ならではの魅力あるものとなっている。

現在の主な業務概要<sup>8)</sup>について、同社ホームページによれば、以下のとおりである。

#### 1) 宗教用品製作販売

宗教の装厳、伝統文化の美を継承・創造する井筒をめざし、歴史の重みや人々の尊さを大切にしながら、時代を反映したデザインの可能性を求め、今という時代に生きる得意先のニーズにきめ細かく対応した神社仏閣用衣裳、調度品を届けている。

#### 2) お祭り・イベント・時代装束プロデュース

「祭」のトータルプロデューサーとして、井筒ならではの独創性とノウハウを生かし、企画・衣裳製作から演出まで、祭りやイベントにかかわる様々な要望にクライアントに寄り添って応えている。今の時代にふさわしい新たな提案にも積極的に取り組んでいる。

#### 3) 日本の風俗・衣裳を実物展示する博物館

衣裳の歴史を展示し時代を感じる手助けになる博物館にしたいという思いを込め、「源氏物語」「竹取物語」を切り口に、様々な平安時代の生活の場面を1/4の縮尺で立体的に表現している。また等身大の時代装束を展示し、時代考証再現に努めている。

### 第3章 京都の株式会社井筒訪問



図2 株式会社井筒法衣店  
(撮影瀬谷)



図3 現在の「風俗博物館」における1/4縮尺の人形  
(撮影瀬谷)

文献調査を進める中、京都にある井筒雅風の設立した「風俗博物館」が本学の「日本風俗美術館」よりも創設時期が遅いことに疑問を感じた。そこで、本学の「日本風俗美術館」設立に至る経緯、関口富左と井筒雅風のやりとり等について、実際に聞き取り調査をしたいと思い、

株式会社井筒にメールを送信したところ、雅風の子息の、九代目 井筒與兵衛社長本人から「貴学との御縁がありましたこと、まったく存じ上げませんでした。(略) よろしかったら休館中ではありますが、お越してください」との返信があり、その後、何回かのやりとりの後、2022年8月、京都の株式会社井筒への訪問が実現した。

京都駅からほど近い、下京区新花屋町通にある井筒ビルは、西本願寺の真向かいに位置し、ビルの5階には「風俗博物館」が併設され、隣は井筒法衣店である。

聞き取り調査を引き受けて下さった九代目 井筒與兵衛氏は、雅風の長男で、現在は分社化した井筒をまとめる(株) Izutsu Motherの代表取締役社長である。まずは、改めて井筒雅風から関口富左や郡山女子大学のことを聞いておられたかどうか、お伺いした。残念ながら何も御存じではなく、両者のやり取りや本学の「日本風俗美術館」開設当時の状況を確認できるものは残されていないとのことであった。しかし、本学教員であった門馬寿子宛てに「風俗博物館」から送られた封書を持参していたので、お見せしたところ、差出人の児玉梅次郎という方のお名前を見て驚かれ、児玉梅次郎は、当時の株式会社井筒の事務職員であったことが判明した。おそらく19年間に及ぶ卒業生からの人形の寄贈に係るやりとりがあったのだろうと推察できる。また、株式会社井筒が郡山市の采女祭りにおける時代装束や三春町の武者行列などへの支援実績を重ねてきたことがわかった。

さらに本学との御縁を探っていた中で、株式会社井筒が神官装束や授与品を扱っていることから、開成山大神宮との繋がりがあるか伺ってみたところ、すぐに調べてくださり、授与品等の販売品をはじめ長年に渡る取引先であったことが判明した。株式会社井筒にとっても郡山の地が大切な繋がりを持っていたことに、九代目 井筒與兵衛氏とともに深く感銘した。

株式会社井筒の分社化された会社の一つで、(株) 井筒企画の代表取締役社長 山本信之氏、同じく(株) 井筒企画社員で「風俗博物館」事務局、学芸員の落里美氏も同席されて、2時間ほど、お話を伺った後、併設の「風俗博物館」が一時休館中にも拘わらず見学を許された。井筒雅風が開設したときから何度も展示を改編し、平成10年には、現在の「源氏物語～六條院の生活～」の展示としてリニューアルし、様々なシーンを選びながら年に2～3回、具現展示を行っている。鑑賞するだけでなく時代を感じさせる博物館にしたいという思いを込め、「源氏物語」を切り口に、様々な平安貴族の生活を1/4の縮尺で立体的に表現している。この表現に改編したのは、現在の九代目の発案と企画によるもので、1/4の縮尺は、展示を俯瞰してみることができ、全体的な理解が可能である。一方、時代考証再現のために等身大の時代装束も展示されており、本学との共通性に触れることができ、心温まるものを感じた。

お話を伺うにつれ、服飾に対する造詣の深さ、それを後世に伝えたいという思いの強さを感じることができたが、それは九代目 井筒與兵衛氏ひとりのものではなく、八代目であった井筒雅風の人となりを受け継ぐものであり、また、株式会社井筒が発展を遂げながら現在に至る



まで八代に渡って培ってきた家風なのであろうと納得する思いであった。

感動的な面会を果たし、今後、井筒と本学の御縁を再開することを約束し、帰郡の途についた。その後、さらに資料からも現在に至るまでの経緯や、雅風と風俗史学について確認できた。雅風自身が「風俗博物館」を創設するに至った背景や風俗史学について、以下にまとめる。

## 第4章 井筒雅風が設立した井筒の「風俗博物館」

### 1. 雅風と風俗史学

井筒雅風によると、1933～1934年頃の京都の風俗史学は、風俗史という名称よりも有職故実の学として捉えられており、当時の学者として知られていたのは、出雲路通次郎、猪熊浅磨で「有職保存会」の指導者として活躍していたという<sup>9)</sup>。一方、学者による団体に対抗する町衆や好事家と云われる人々の存在があったという。既成の学者に対抗するとして、自ら「風俗研究会」を創設したのが江馬務で、「風俗研究会」は、対象を町衆に求め、その啓蒙が大きな目的であり、江馬は、会誌「風俗研究」に盛んに研究論文を発表していた。1930年『新修有職故実』を出版すると江馬務の名声は高まっていった。

井筒雅風は、1935年に立命館大学専門部に入学しており、当時、立命館大学では江馬務による「有職故実」という講座が開かれていた。受講した雅風は、ここで江馬務と出会った。雅風は、この時を「自分にとっての風俗史へのスタート」<sup>10)</sup>と後年述べ、「当時、風俗史の第一人者であった江馬務との出会いが自分のその後の人生を大きく変えた」とも記している。

江馬務の指導により、雅風は、全国の子供たちを対象とした時代風俗行列を企画し、武者行列、日本お伽囃行列、世界お伽囃行列へと進展し、やがて一般人へと進めていったほか、教材用の時代風俗画の掛図を作成した。江馬は、西洋の歴史的服装を復元作成し、併せて日本の時代風俗の服装も復元していた。1948年以降には、各地で「服装史ショー」を開催することとなり、雅風は、この開催にも協力した。

1949年、井筒雅風は風俗史を発展的にとらえ、江馬務の設立した「風俗研究会」の名称を改める形で「日本文化学会」を設立し、会長を江馬が務めた。雅風は、1950年に風俗研究所の主幹を江馬より譲られ、江馬務はその所長に昇格するとともに、雅風が設立した財団法人宗教文化研究所の理事に就任した。その後、「日本文化学会」が風俗の研究に傾いていったことを受け、1952年、名称をその実にふさわしい「日本風俗文化学会」と改め、江馬務が引き続き会長を務めた。

風俗史学とは何をいうのか。風俗とは何をさすのか。風俗史学会三十周年の折りに、井筒雅風は、「風俗史学会30周年をかえりみて」の中で次のように述べている。

風俗史学とは、研究の端緒を形而下の諸事象に求め、これが探究とともに、この事象を

通じて形而上の考究をなすものと考えている。従って、文化史という表現のない時代に於いては、個々の服飾史、染織史、食物史、住居史、生活史すべてを包含する広般な学問であり、江戸時代の好事象的発想もその端緒であり、古く、有職故実といわれる宮廷、武家の伝承や、又、民間に残る民俗も、眼にふれる事象であった。更に国内の研究から発したものであったが、世の推移とともに世界に視点が拡がることは、当然の事と云える<sup>11)</sup>。

また、井筒雅風は、風俗史学の研究範囲について『風俗史学の三十年』における第二編の広がる風俗史の研究の項目から取り上げ、次のように述べ、風俗史学の学問としての広さを強調している。

『一、課題と展望 二、服装 三、化粧・結髪 四、家具調度 五、歳時と暦 六、人の生と儀礼 七、作法 八、教育 九、遊戯・娯楽 十、芸能 十一、産業と経済 十二、武具・武装 十三、性・身体 十四、生活と自然 十五、女性』となっており、風俗史学の範囲は、人類生存のすべてにわたるだけ限りないものであり、社会文化史も生活文化史も民俗学、人類学等々すべてを範疇に入れるものである。<sup>12)</sup>

昭和35(1960)年、「日本風俗史学会」が創設されることになり、京都の風俗研究会の後身である日本風俗文化学会は発展的解消を遂げることとなる。初代会長を江馬務、会務を統括する理事長に藤沢衛彦が務めることとなった。この風俗史学会の趣旨について、第三代会長であった林屋辰三郎は、「戦後の新しい風俗現象の展開にも刺激されて、東西に高まった風俗の歴史的研究の気運をふまえ、学問的な充実と総合発展をはかるために発企されることになった。風俗研究会の時代がとかく学問の応用的側面を重視したのに対して、新しい風俗史研究は学問の理論的側面を強化しようと意気こんだものである」<sup>13)</sup>と述べている。

井筒雅風は、1961年に日本風俗史学会の常務理事となり、関西支部長も務めている。井筒雅風と風俗史学との関わりは、江馬務との出会いによるところが大きい。有職故実・風俗研究家の江馬務との出会いについて、雅風は、「私の人生における最も大きなインパクトになったと言える。風俗研究所に出入りするうちに研究所の経営を任され、風俗研究が私の一生のライフワークとなった」<sup>14)</sup>と述べている。そもそも家業が本業であった井筒雅風は、自身の風俗研究について「これからの時代の商いは、学問的な裏付けが必要になる。昔流のやり方ではやっていけなくなる。まして神社仏閣など永い歴史のあるお得意先を対象とするには、風俗や有職・故実の知識を持たなければいけない」<sup>15)</sup>と思ったことがきっかけであったという。こうしたところに井筒雅風の人間性と誠実さ、学問への真摯な思いを感じる。

## 2. 雅風の設立した「風俗博物館」と等身大風俗人形

昭和33 (1958) 年、井筒雅風は、京都市美術館に於いて、「日本時代風俗展」を江馬務の指導を得て開催した。一週間の会期であったが、約三万五千人の入場者を得て、驚異的な盛況であったという。この風俗展には、日本全国だけでなく海外からも注目が集まり、風俗史上からも意義深いことであったと考えられる。

井筒雅風は、著書『原色日本服飾史』の中で、「昭和30 (1955) 年、まだ一般に外遊が認められなかった時、たまたま3カ月間世界旅行の機を与えられ、英国ロンドンでマダムタッソーの蝋人形館を訪れ、その迫真性に心を打たれた。また各国の服飾展示の多くの博物館を見て、日本でも風俗博物館を作ることの発起し、人形はリアル過ぎない京人形に拠ることにした」<sup>16)</sup>と述べている。マダムタッソーの蝋人形との出会いが雅風の心を大きく捉えたことが日本での等身大風俗人形を製作するきっかけとなり、人形は京人形でと考えることに雅風らしさを感じる。井筒雅風は、世界旅行から帰国して昭和32 (1957) 年に、風俗博物館建設のための等身大風俗人形計画を発表している。そして、昭和33 (1958) 年に京都市美術館で開催した「日本時代風俗展」は、等身大風俗人形65体に着装させて発表しており、このことについて井筒雅風は、「風俗博物館設立準備のためのものであった」と述べている。大盛況となったこの「日本時代風俗展」により、雅風は、「自分の風俗史に対する具体的な実証の立場が、大きく世に知っていただいたということになったのではないか」<sup>17)</sup>と後のラジオ番組の中で語っている。

京都市美術館における「日本時代風俗展」の開催後、京都市長や滋賀県知事より設置に対する誘いを受けるも、機が熟さず、その後、昭和49 (1974) 年に井筒南店ビル建設により、雅風は、その5階に財団法人宗教文化研究所所轄の博物館として「風俗博物館」を開館した。井筒雅風は、同館長に就任するとともに学芸員を兼務した。京都市美術館に於いて発表した等身大風俗人形65体を母体としての設立であったが、当時、株式会社井筒には、昭和26年に設立された財団法人宗教文化研究所があり、宗教の形而下的服飾、祭祀儀礼、音楽絵画等を研究対象として、その服飾については古代以来の歴史的研究を進展させ、併せて一般に発表を企画していたこと、家業である宗教用の法衣、装束の製作販売における学問的研究機関<sup>18)</sup>として存在していたことが、礎となっているように思われる。

また、井筒雅風は、昭和39 (1964) 年に『袈裟史』を執筆し、発行しているが、その当時、京都女子大学教授で日本風俗史学会々長であった江馬務は、「袈裟史に序す」として次のように述べている。

井筒雅風氏は、株式会社井筒の社長で、京都法衣商として連綿数代を經過した老舗の店主でもある。氏は、嘗て立命館大学に学び、多年不肖の経営する風俗研究所に主幹として、風俗史の研究に専念され、先に日本各時代の等身の人形を造り、これに適当な服飾を新製

して着せ、これを解説した「日本時代風俗写真図録」の著があり、傍ら京都成安女子短期大学の教壇に立ち、日本風俗史学会の理事として斯界に活躍され、今後の風俗史界への与望を担ってられる。いまここに袈裟史の完成を喜び、僧服全史の完成の近からんことを念願しつつ、氏の前途を祝福するものである。

また、京都国立博物館長で文学博士の塚本善隆は、「序文」の中で、井筒雅風について次のように述べている。

京都は、法衣商は多いが、その業に密着した服飾史の研究所をもち、しかもその主人が真摯な研究者でもあるような例はあまり見ない。伝統の法衣業を継いで、その業務に精励せられるとともに、自らの研究所の主宰者として江馬務先生等の専門学者の指導を受けつつ、日本の服飾の発達変遷を明らかにする文献実物の資料の蒐集整備につとめ、特に京都を中心にして展開した美しい日本服飾の実物を等身大の人形につけて公開するなどして広く京都の教育面にも貢献せられたことは市民によく知られ感謝されているところである<sup>19)</sup>。

江馬務ならびに塚本善隆は、このように、井筒雅風が家業を本業としながら、風俗研究家としても篤学な人物であったことを紹介し、その活躍を称え、雅風の功績に敬意を表している。なお、著書『袈裟史』も、本学図書館に井筒雅風御本人より寄贈されている。

雅風は、平成6年8月に放送されたNHKラジオ第一放送番組「人生読本」の中で、「法衣とか、装束とか、そういうお寺とか神主さんのものは、歴史が、法衣はインドから始まり、神様の関係のことは日本の古代史からやらなければ、また平安時代を勉強しなければ、どうしても完全にできない、仕事に関連した学問をしたいとの思いで立命館大学の夜学に入学した」<sup>20)</sup>と述べており、さらに「仕事の中で、この私の与えられた法衣、あるいは装束という仕事の原点であるところの風俗史を更に突き進めていこうという努力をするようになった」と語っている。また、同番組の中で「私の風俗史の専門における強みというのは、衣服を家業として製作するということではなかろうか」と話し、等身大風俗人形に着装させての展示に関しても「具体的にやって参ることができたのは、家業が法衣とか装束の仕事をさせていただいているというその立場、これが風俗研究における大きな利点であったのではなかろうか」<sup>21)</sup>と語っている。

平成4年12月15日付の京都新聞に「風俗博物館」についての記事が掲載されている。

オープンは、昭和49年。店舗改築を機に収集した衣装類を展覧しようと開設した。「時代時代の生活をよく知るには当時の衣装をまとい、生きているような姿を見せるのが一番いい」。八代目当主で館長を兼ねる井筒雅風さんは、設立の動機をこう話す。日本には十

二単衣(ひとえ)をはじめ、文官や武士の正装、庶民の衣服など、時代とともに発達した和服の豊かな伝統がある。「でも繊維は、せいぜい二百年しかもたない。現物が入手できるのは江戸以降で、あとは文献や遺物をもとに復元するしかない」という。井筒さんは商売の傍ら服飾の研究に没頭、日本服飾史や有職故実の分野では大学講師も務める第一人者。それだけに展示物の時代考証には定評がある」<sup>22)</sup>

井筒雅風の設立した「風俗博物館」では、平安時代や鎌倉時代、室町時代というその時代の公家や武家婦人の衣裳が相当数再現されている。展示会は半年に一回くらいの割合でテーマを変えて催しており、その時代の織物を特別注文するのでかなりの額になる<sup>23)</sup>という。



図4 1/4縮尺の人形  
(「風俗博物館」)  
(撮影瀬谷)



図5 時代考証による装束  
(「風俗博物館」)  
(撮影瀬谷)

## 第5章 井筒雅風と関口富左

井筒雅風と関口富左の出会いについては、確実な資料が残っていないので、想像するしかないが、昭和33年の京都市美術館における「日本時代風俗展」の偉業は家政学会でも大いに話題になったであろうから、関口富左はその頃に、井筒雅風との関係を模索されたのかもしれない。第1章で取り上げた「風俗史美術展 ～衣を中心として～」の配布資料には、先の挨拶文2頁に続いて、風俗研究所主幹、日本風俗史学会常務理事、井筒雅風の「郡山開成学園 風俗史美術館設立を祝して」という祝辞が2頁記載されている。両者の出会いに触れる部分を引用すると次の通りである。

もう六、七年の前の事でありました。忽然と関口先生の御来訪をうけ先生より小人形に



各時代の風俗を着装させてこれを展観し学校の教育に資したいとの御要望を承ったのでありました。

たまたま私も亦かねてより同様の考えから等身大の人形によって京都の美術館に於いてこれを発表し今尚逐年その数を増加しようと考えていることを御話致しました。

又更に京都に於いてこの常設展観設備を作りたい念願を持っている次第を申しているうちに談たまたまこの学園にその会館を建設しようとの御話を承ったのであります。<sup>24)</sup>

しかしながら井筒雅風はこの時、関口学長の想いを受け止めつつも半ば夢物語と捉えていたとある。実現を危ぶみつつも昭和41年になって招きを受け、井筒雅風は郡山に来られたのである。祝辞は数行の後、次のように続く。

本春その建設のほぼなった時御招きにより当地に参り具にその現状を見て眼をみはったのであります。

今迄到底実現しないだろうと思って居りました私は、関口先生が常に目的をたてそれに向って邁進必ず達成を期されようとする熱意と不屈の精神に真に敬服したのであります。<sup>25)</sup>

## おわりに

雅風の著書や関係資料等による文献調査から、井筒雅風は、宝永2(1705)年創業の法衣商を営む老舗の八代目として京都に生まれ、伝統の法衣業を継いでその業務に精励しながら、その業に密着した研究所を持ち、さらには、自ら「風俗博物館」を設立した風俗史学の真摯な研究者であったことがわかった。風俗史学については、恩師であった江馬務とともに「風俗研究会」を創設するところから、その後の「風俗史学会」創設と発展に至るまで尽力し、風俗史学の礎を築いた。また、聞き取り調査をとおして、子息である九代目 井筒興兵衛氏からは、井筒雅風の人間性と誠実さ、そして学問への真摯な思いを持った人物であったことを感じ取ることができた。

家業が本業であった雅風は、自身の風俗研究について「これからの時代の商いは、学問的な裏付けが必要となる。永い歴史のあるお得意先を対象とするには、風俗や有職・故実の知識を持たなければいけない」<sup>26)</sup>と述べ、日本の服飾の発達変遷について研究を重ね、多数の貴重な著書を残し、さらには、実物大の等身大風俗人形に着装させて行ってきた展示は、日本服飾の継承としても、その教育的功績は大きなものであったと言える。

雅風が京都市美術館で「日本時代風俗展」を開催したのが昭和33(1958)年、本学で「風俗史美術展 一衣を中心として一」が開催されたのが昭和41(1966)年、京都の株式会社井筒に「風俗博物館」が開設されたのが昭和49(1974)年、そして本学の「日本風俗美術館」が完成し

たのが昭和59 (1984) 年である。この四半世紀の間になされた京都と郡山での風俗史学的成果、さらには、それを学生に伝えたいという二人の教育者としての偉業に、圧倒されずにはられない。

井筒雅風の監修を受け、日本服飾資料としてこの度「生活文化博物館」に継承された着装人形35体は、今後最新の服飾研究の成果を加えて解説を改めることがあっても、末永く展示するに値する貴重な教育研究資料である。

【註】

- 1) 関口富左「日本風俗美術館の開設について」/『風俗史美術展―衣を中心として―』郡山開成学園 1966年1頁
- 2) 『創立四十年学園史』郡山開成学園 1986年142頁～144頁
- 3) 「日本風俗美術館リーフレット」郡山開成学園
- 4) 井筒雅風著『日本女性服飾史』光琳社 1986年139頁
- 5) 芳賀登「井筒雅風の死を悼む」/『日本風俗学会会誌』35(2)(126) 1996年64頁,65頁
- 6) 井筒雅風著『古希記念文集 撫脛翳手』京都成安女子学園 1987年416頁～427頁
- 7) ～8) <https://www.izutu.co.jp> 株式会社井筒ホームページ 令和4年9月30日閲覧
- 9) ～10) 井筒雅風著『風俗史学の三十年』つくばね舎 平成2年 / 井筒雅風著『人生まっただなか続 撫脛翳手』京都成安女子学園1996年289頁
- 11) 井筒雅風著「風俗史学会30周年をかえりみて」/『風俗105号』平成2年/前掲9) に再掲295頁、296頁
- 12) ～13) 井筒雅風著『風俗史学の三十年』(つくばね舎 平成2年)/前掲9) に再掲302頁
- 14) ～15) 『宗教と現代』鎌倉新書発行1989年1月号/前掲9) に再掲302頁
- 16) 井筒雅風著『原色日本服飾史』光琳社 1989年 342頁
- 17) NHKラジオ第一放送番組「人生読本」平成6年8月22日放送 / 前掲9) に再掲741頁
- 18) 井筒雅風著『日本服飾史 女性編』光村推古書院 2015年6頁
- 19) 井筒雅風著『袈裟史』文化時報社 昭和39年 序文
- 20) 『宗教と現代』鎌倉新書発行1987年1月号/前掲9) に再掲612頁
- 21) NHKラジオ第一放送番組「人生読本」平成6年8月23日放送/前掲9) に再掲 742頁
- 22) 京都新聞(平成4年12月15日付)/前掲9) に再掲 607頁
- 23) EAST WEST JOURNAL CORPORATION(平成2年1月発行)/前掲9) に再掲 719頁
- 24) ～25) 井筒雅風「郡山開成学園 風俗史美術館設立を祝して」/『風俗史美術展―衣を中心として―』郡山開成学園 1966年3頁
- 26) 『宗教と現代』鎌倉新書発行1989年1月号/前掲9) に再掲302頁

